

尊きもの

塚 越 一 彦

奨励者紹介[つかごし・かずひこ]

同志社大学副学長

研究開発推進機構長

同志社大学理工学部教授

[研究テーマ]微小空間で見られる流体流れの不思議な世界

わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」

すると、玉座に座っておられる方が、「見よ、わたしは万物を新しくする」と言い、また、「書き記せ。これらの言葉は信頼でき、また真実である」と言われた。

(ヨハネの黙示録 21 章1—5節)

15 年を経ての祈り

ご紹介いただきました理工学部の塚越です。ランチタイム・チャペル・アワーで話をさせていただくのは、今回が初めてになります。どうぞ、よろしくお願いいたします。

私は本学を卒業していますが、教員として学校法人同志社に入社したのは1995年になります。理工学部、当時の工学部が京田辺キャンパスに全面移転したのが1994年ですので、工学部移転後、2年目の年の着任になります。着任して10年目に、痛ましい事故は起こりました。今から15年前にさかのぼって話をさせていただくことになります。

2005年4月25日午前9時過ぎに、JR福知山線の脱線事故は起こりました。107名の方が亡くなっておられます。その中には、3名の本学の学生さんが含まれていました。この京田辺キャンパスに向かっていました。2講時目の講義に出席する予定で電車に乗っておられたと思います。いつものように「同志社前駅」で降り、木々の青葉が芽吹き始める季節、坂道をのぼり、大学の正門を通過して、講義を受けるつもりでおられました。そのあとは、友達と語り合いながら構内で昼食をとるといった、ごく普通の日が待っていたはずです。いつもと変わらぬ一日が始まろうとしていました。

その普通の日が、一瞬の事故で消え去ってしまったのです。事もあろうに、これから始まり続くはずであった人生そのものまでもが、全て奪われてしまいました。亡くなられた3名は、女子学生さんでした。彼女らは、いつもの電車に乗って、この同志社大学京田辺キャンパスを目指していたのです。それができなかった、かなわなかったのです。その「思い」を推すると、15年たった今もいたたまれない気持ちになります。

す。

また、同じく2005年の4月28日、JR福知山線の脱線事故からわずか数日後になりますが、福島県の磐越自動車道でバスが横転する事故が起きました。ここでも本学の学生さんが一人亡くなっておられます。春の連休を直前にして、突然、降り掛かってきた事故でした。

「逝去者追悼礼拝」のはじまり

2005年に起こったJR福知山線脱線事故および磐越自動車道バス横転事故の犠牲となった本学の学生さん4人を偲んで、毎年4月に追悼礼拝が行われるようになりました。その礼拝には、御遺族、友人を含めて多くの方々が出席され、故人を思い起こす大切な機会となりました。こうした経緯を踏まえつつ、2009年度からは、これまでの同志社大学の長い歴史において、志半ばにして在学中に亡くなった学生さん、そして在職中に亡くなった教職員の皆さんを含めて、ともに追悼する今日の「逝去者追悼礼拝」が執り行われることになりました。

例年、「逝去者追悼礼拝」は4月に行われていますが、今年はコロナ禍で11月4日の今日に延期されました。お集まりいただいている皆さんとともに、志半ばで亡くなった学生さんや教職員の皆さんの魂の平安を心からお祈り申し上げます。そして、「逝去者追悼礼拝」の機となりました悲しい事故が起こらないよう私たちは、安全で安心な社会づくりに、皆で努めていかなければいけないと思っています。身近なところでは、当然のことではありますが、日頃の自転車やバイク、自動車の運転等、十分に気をつけなければなりません。事故以外でも様々なことが悲しい死を引き起こしていますが、未然に防ぐことができるような事故については、それらが起こらないように、人として、それぞれの立場で、働きかけ、努めていく必要があります。

生と死について

一方、事故以外の病気等で、亡くなられた方も多くいらっしゃいます。重ねて、深く哀悼の意を表します。この礼拝を通して、誰しもが、命というものを改めて考える機会をいただいています。命、生命について考えていくと、その終焉としての死は、避けて通ることはできない、誰しもが迎えることを再確認することになります。私は、理系の一教員であり、宗教家ではありません。しかし、この「逝去者追悼礼拝」は、故人を偲び、魂の平安をお祈りする場であるとともに、今、ここにお集まりの皆さんが、それぞれの生と死について考える機会を神様に与えていただいている場でもあると思っています。

先程も申し上げましたが、私は、宗教家でも思想家でもありません。しかし、生と死については、古代の昔から人々が考え、多くの著書にも述べられていることを知っています。そして、生物学的な立場ではなく、人として生きていく中での生と死については、はっきりとした答えのようなものはないのではと思っています。共通の答えを出す必要はなく、またできないことなのかもしれません。

「尊きもの」

今日のメッセージの題目は「尊きもの」とさせていただきます。尊きもの、敬うものは、世の中にたくさんあります。また、それぞれの考え方や価値観によっても変わってきます。生と死を考えると、人がこの

世に生まれてくること、そして、生きていくこと、更には、誰しものが迎える死というもの、これらのことは、すべての人にとって「尊きもの」と、私は思っています。生まれてくること、生きていくこと、そして迎える死、それら「尊きもの」に、新たに何かを加えようとは思っていません。ただ、それらの中でもいちばん身近なことを、常に意識したいと思っています。それは、「生きている今」になります。今、ここに皆さんということ、この瞬間を第一に「尊きもの」として思いたいのです。よく言われることではありますが、昨日はすでに過ぎ去った過去であり、また明日はまだ誰も知らない未来なのです。自分が生きているのは、今のこの瞬間しかありません。最も「尊きもの」だと思っています。

地球上である人とある人が出会う確率は、地球規模で考えると、とてつもなく小さい数字になっていきます。数遊びになるかもしれませんが、世界の人口を仮に 80 億とすると、無作為に 2 人が出会う確率は、「80 億分の 1」掛ける「80 億分の 1」となります。今、ここにお集まりの人が 20 名いらっしゃるとしたら、この出会いの瞬間が存在する確率は、「80 億分の 1」の 20 乗という、果てしなく小さい数値になります。さらに、これに時間軸と宇宙空間を考えていくと、無限に 0 に近づくような確率です。このようなあり得ない確率の出来事が、今、皆さんと私との間に起こっているのです。人との出会いを、数値や確率で表現するのは、お門違いであることと理解はしています。しかし、この瞬間、ここでの皆さんとの出会いは、不思議なほど奇跡的な瞬間だと思います。一生の間で、二度とこの瞬間が訪れないのは確かだと思います。

死は、いつどこで、私たちに、降りかかるのかわかりません。死を迎えるまで、私たちは生きていきます。そして、多くの人たちと共に過ごします。しかし、このように今の皆さんと個々に出会うことはあっても、同時に皆さんと会うことは、二度とないと思っています。この一瞬、今だけです。このような瞬間と瞬間が、繋がりがあって、一生が形作られていきます。今この時を、「尊きもの」として、大切にしたいと思っています。

「良心の丘」にて

私たちは、同志社に集まっています。これも人生の一つの瞬間で、「尊きもの」、ご縁です。15 年前、亡くなられた 4 名の学生さんもここで学んでおられました。同志社の良心碑には、新島先生の言葉が刻まれています。「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ」（良心が全身に充滿した青年が現れることを）。私は、京田辺キャンパスを、個人的心中にて「良心の丘」と呼んでいます。この丘には、いつもさわやかな風が吹いています。その風に乗って、新島先生の声が聞こえてきそうです。やさしい微笑みとあたたかな励まし。ここはまさに「良心の丘」、同士が集い、心を通わせながら、学びを通して未来を切り開いていくところです。亡くなられた学生さん、肉体はこのキャンパスにたどり着くことはできませんでした。しかし、心は、今もこのキャンパスにあるように思えてなりません。

今、皆さんとの出会いがここにあります。そして、このような出会いは二度と訪れるものではないと思っています。この出会い、生きている今を、皆さんとともに「尊きもの」として大切に思うことで、いつまでも皆さんと心を通わせることができるような気がしています。ここ「良心の丘」にて。

最後になりますが、皆さんの今後の素晴らしい出会いに思いを寄せて、私の今日の奨励とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。